

# 土曜 ライフ・楽しむ

## コロナ禍 彼ならどんな応援歌を

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



私も少し登場、「真鍋のバカヤロー」と書かれています。



「GS」と聞いて何を連想しますか。ガソリンスタンド、車やオートバイの名前、スキーの回転など。しかし、グループサウンズだという人が多いかもしれません。私もその1人です。

1960年代後半、ビートルズが大流行する中、たくさんグループが世に出ました。ザ・スパイダースの「フリフリ」がGSとして最初のレコードとされています。

そのメンバーで日本を代表するギタリスト、また作詞・作曲家として音楽界をリードし、俳優としても活躍された井上堯之さんが、突然目の前に現れたことがあります。

井上さんは2009年1月「自分はいかに生き、何をすべきかを考え続けてきた結果としての引退となりました」と発表し、何と小樽にやってきました。



南小樽病院理事長の大川博樹さんは、高齢者医療の専門家ながらご自身でバンドを持つほど音楽好きの方。二人の出会いは小樽でのライブ中に体調を崩した井上さんを診察したことがきっかけで、その時に病室で音楽談議に花が咲いたそう。

井上さんは、「短時間でこれほど仲良くなれた人は他に例がない。神様が引き合わせてくれたとしか考えられない」と言います。1月1日に

引退を決めた井上さんは、大川先生にボランティアをしたいと伝え、3日には小樽に到着しました。

大川先生の紹介で一献傾けた席で、情報誌「悠悠と。」での対談を依頼。さぞうずうしいやつと思われたかもしれませんが、突然舞い降りたスターには一気呵成に体当たりすべきと思っただけです。

おまけにコラムの連載まで依頼し快諾を得ました。引退の詳しい背景や小樽での暮らしなどは井上さんが小樽生活を綴った「ボランティアでみつけた新しい旅 病院ライブで童謡・唱歌」（近代映画社）に記されています。中に

18年5月2日に「くなくなったでもうすぐ命日です。遊行（ゆぎょう）。いわゆる「さすらい」たいと言っていた井上さん、今どこをさすらっていますか。

井上さんが作詞作曲した「Open Your Eyes」の中に、「極限の苦しみの中でさえ人々のために働く人がいる 真摯なその姿に心打たれた人たちが いま立ち上がるだろう」という歌詞があります。コロナ禍で懸命に闘う医療関係者に向けた言葉のようにも聞こえます。

もし今、この時代に井上さんが生きていたら、私たちにどんな応援歌を聞かせてくれるでしょうか。ぜひ聞きたいものです。